

地域教育文化学部地域教育文化学科 異文化交流コース1年 松永梨音
ベトナム国家農業大学 3月1日～14日

以前このプログラムに参加した先輩から情報を頂き、現地へ向かった。私にとって初めての海外であるベトナムでの2週間では多くの収穫があった。

日本語教室では派遣人数が多かったため、1日に1回授業に参加した。主に個別での指導で、わからない言葉の説明や、教科書に沿った内容について実際の日本文化の紹介を交えながら指導にあたった。常に意識していたのは、現地の皆と私たちは同年代であるということである。大学生の私たちだからこそ伝えることができる日本の文化や言葉が多くあった。例えば「ハンサム」という言葉について、日本の若者はあまり使わず「イケメン」の方が多用されることは、教科書だけでは得られない知識だ。また、「お花見」については桜がないベトナムには存在しない文化であり、日本人、特に大学生はどのように楽しむものなのかを話した。同時に、学生大使として日本のことを紹介する立場なのだから、日本人としてより日本語や日本文化を学ばなければいけないと感じさせられた。

授業の前後や食事、休日の観光では様々な経験をした。現地の大学生との会話は、日本の友人ともするような何気ないことから、日本とベトナムの歴史までにわたった。その中でも、日本のことがとにかく好きで「日本人になりたい」、「日本に行きたい」と熱心に話してくれる何人もの人と出会ったことは、印象的だった。しかし、日本のことがよほど好きでないと、日本語の勉強は難しく挫折してしまう人がほとんどだ、という現状を聞き、日本語指導については改善すべきこともあると感じた。

現代のベトナムについてはほとんど知識がなかったが、実際にベトナム人と同じような生活をしてみると多くの発見があった。バスでの運賃の払い方やスーパーでのルール、服装や流行の髪型は日本とまるで異なっていたが、日本の商品をよく店で見かけたり、日本の漫画が人気だったりすることには驚いた。箸の文化や言語、建築物は中国やフランスといった他国の影響を受けているし、韓国からの輸入品もよく見かけ、一つの国でいくつもの文化を体験できたような気がした。

滞在中には、男性が恋人や女性の友人、先生に花束やプレゼントを贈る「女性の日」があったが、その期間中の大学の雰囲気は楽しく、店でも大きなイベントとして扱われており興味深かった。同じ大学生であっても、朝から夜まで開講している授業時間の長さや、スポーツがさかんで体育も自由時間もサッカーやバレー、セバタクローを楽しんでいる光景には驚いた。

いくつか目標を立ててこのプログラムに臨んだが、そのうちの一つは「ベトナム人は日本についてどう思うのか」を知ることである。生活する中で飲食店の店員さんなどは、私たちが日本人だと知るといつも親切に接してくれていたが、実際にどのような思いを抱いているのかは渡航前から気になっていたことだった。仲良くなった子にこの質問をしたところ、難しい問いでありながら、一生懸命答えてくれた。客観的な考えや個人の意見を聞いたことはもちろん、そのような話をできるところまで仲良くなれたということにも大きな意味があった。他にも、日本ではよく知られているベトナム人の話は現地では有名でないことがわかったり、ベトナムの衛生環境について日本と比較して改善すべきだと語ってくれる人がいたり、直接話を聞くことで得られたものが多くあった。私はベトナム語を使うことができないため、ジェスチャーやアイコンタクトといった体を使うコミュニケーションの方法がどれだけ有効なのかも体感

できた。

また、滞在期間中には東日本大震災から5年という日も迎えた。この日をほとんどの人が覚えており、宮城県出身である私に震災について質問をしてくれたり、当時のことを話してくれたりしたことに感動した。「日本人の対応を尊敬する」と言ってくれる人や、「あなたの家は大丈夫だったの?」と心配してくれる子もあり、ここでも目的の「外国から見た日本を知る」や、「海外から日本を見る」を実行できたと感じる。

改めてこの2週間を振り返ると、毎日が良い経験だったと言い切ることができる。生まれ育った日本と比較し、ただ評価するのではなく、異文化として捉え楽しむことができた。新興国ではあるが、学ぶべき点がいくつもあり、日本人として考えさせられることもあった。日本語指導の実践から得た経験は将来の目標に役立てたい。何よりも、日本語を熱心に学ぶ現地の学生から受けた刺激は、これからの大学生活への助けになるだろう。これからも機会があればこのようなプログラムに参加し、またベトナムに行くという約束も果たしたい。